

修學旅行日誌中の記事に就きて：批評

著者	信天翁
雑誌名	龍南會雜誌
巻	3 6
ページ	5 0 - 5 2
発行年	1895-05-07
その他の言語のタイトル	修学旅行日誌中の記事に就きて：批評
URL	http://hdl.handle.net/2298/4575

一望花明草愈青。淡煙靄々午風薰。曳筇郊外去。何地遮莫閑遊養性靈。

觀藤花

山内烟園

路入江村曲々斜。悠然曳杖問田家。紫藤一架春光殿。三月下旬初着花。

稼堂先生曰 淡々着筆而味自足、

四月九日友人步月

一雙木屐一杖筇。乘月吟歸步不慵。清光照路明似晝。青松影裏踏蒼龍。

稼堂先生曰 結句冷雋非夷所思、

批評

一奇漢あり、名を署して信天翁といふ、自ら稱す太平洋中の人也。頃者郵便に托して左の「篇」を寄せぬ、吾儕其何人たるやを知らず
に依りて植木附近の人たるを知るのみ。今其熱心を嘉して特に之を掲ぐ。編輯委員記

修學旅行日誌中の記事に就きて

信天翁

現今主として使用する攻撃水雷には、魚形水雷の他に外装水雷なるものあり。(他はなほ種々あれども、今日一般に用ゐらるゝは右の二種とす、千代田艦が清艦揚威を轟沈するに用ゐたるは、即ち外装水雷なり)。砲煩の進歩せる今日に在ては、其使用定て困難なるべきも、其の成功の確實なるは、魚雷の上にあり。清佛戦争の時、佛の水雷艇清の二艦を轟破せるが如き、實に此外装法によるものなり、故に今日に至るも、なほ其の信用を減することなし。

防禦水雷には「マイン」を用ふとあり、「マイン」とは布設水雷の謂なり、大別して永久防禦水雷、艦用

布設水雷の二種とす。永久防禦水雷は軍港重要なる港灣水道等を防衛するものにて、戰時に臨み一度之を布設するときは、交戰の終極に達する迄、永久に保持す可きものにて、水雷隊布設部なるものを擔任す。船用布設水雷は艦船に應用すべきものにして、艦隊の一時々の根據地と定めたる港灣を防禦する等に用ゆるものなり。而て共に視發水雷、電氣觸發水雷、器械水雷の三種に區分す、皆防禦の目的要具、潮流、海底淺深、船舶交通の如何等、其他百般の事項によりて適用を異にし、共に數種に分類せらるゝと雖ども、其の一般の性質は左の如し。

視發水雷とは、敵艦水雷の上にあるを視認して、陸上衛所より電流によりて發火せしむるもの、觸發水雷とは、敵艦の衝擊により發火電流の電路を完連し、爲めに發火するもの、機械水雷は、水雷内自ら發火の裝置を具備し、敵艦の觸衝により自動的に發火するものとす。

記事、又防禦水雷は電氣的のものより以下數行は全く誤謬かと思はる。前述の如く、視發及び電發觸發水雷は、共に電流を用ゐ、視發水雷の如きは、發火者自ら衛所内ある電鑰 Key を壓し發火電流を通ずるにあらざれば發火せざるものにして、最も安全なるものなり。觸發水雷の如きも、敵艦進襲し來るに當り、衛所内の電鑰を壓えて、發火電路は單に水雷内の電路啓閉器のみによりて隔縁せらるゝに至る迄は、縱令味方艦船之に觸るあるも、決して轟發の患なし。器械的水雷に至りては、激發發火法、摩擦發火法の二器械的發火法と、化學的發火法、及び電氣的發火法、及び四發火法ありて、沈置に當て危險にして、一度布設したるときは、彼我共に通路を阻絶せられ、又戰爭後之を揚收するに最危險なる等、諸種の害あり。而して最も（比較的）安全なるは電氣的器械水雷なりとす。

記事、中、浮標水雷とあるは、則ち視發水雷中の一種なり、故に不測の患を防かんか爲め云々の如きは、其の意を解する能はず。思ふに危險なるが爲にはあらずして、船艦の推進機等によりて、水雷に損害を及すを慮る故なるべし。

其の横斷面の半徑を危害半徑と云ふの如き、想ふに誤謬の甚たしきもの、毀害半徑とは裝藥の爆發に

よりて其の直接作用を蒙る最大距離を稱するものなり、而して當時實驗より續釋せる算式は左の如し。

裝藥砲火藥なるとき

$$R = 3.65 \sqrt{L}$$

「ダイナマイト」又は線火藥なるとき

$$R = 5.5 \sqrt{L}$$

Rは毀害半徑にして、呎を以て稱しLは裝藥の重量、ポンドを以て稱す。故に危害半徑の水雷罐の横斷面の半徑と異なるや明なり。浮標水雷罐(裝藥線火藥五百英^{ポンド}斤)の半徑は三十二吋余なり、若し水雷爆發の直接作用を及ぼす距離此にとゞまらば、水雷の効力豈に又笑止ならずや。筆記者の誤謬も又た甚だし。若之に三百斤の火藥を用ゆるときは、半徑は三百呎と云ふもの、又誤謬たる明なり。

雜 報

振古未曾有の盛事

皇徳の及ぶ所萬物皆霑ひ、王師の向ふ所草木悉く靡く。回顧すれば昨年の盛夏、宣戰の大詔煥然とえて發布せられてより、六師遙々萬里の征途に上り、劍影燦然鴨綠の江畔に閃き、礮擊殷々奉天の城頭に轟き、旭旗高く摩天の雪颿に飄り、鐵蹄遠く湖北の曠野を蹂躪し、戦へば勝ち、攻むれば取り、要塞重關一としてわが有に歸せざるを

し、亦快ならずや。今や膺懲の大義漸く完く、請和の使節來り朝す、生れて此盛世に遭遇し、親しく國威の發揚を觀る、人生の快事豈之に過ぐるものあらんや。吾儕學窓に在り、筆を投して戎軒を事とするに由なしと雖、意氣勃發、夢魂屢陣頭を繚繞し、腕骨稜々鳴て止まざるものありき。今や暴清罪を悔みて來り降り、臺灣澎湖盛京諸州、遂に我有に歸す、是實は振古未曾有の盛事、國民たるもの、焉んぞ狂喜狂舞せざらんや。嗚呼熱情腔に滿ち、歡喜胸に溢る、宜しく之を勃發して、大に祝する所なかるべからず。由來日東の男兒、